

甲状腺ホルモン不応症診療の手引き

～診断・治療が難しい病気についての手引きを初めて制定～

日本甲状腺学会臨床重要課題「甲状腺ホルモン不応症診断基準」の研究グループは、「甲状腺ホルモン不応症」という病気をどのように診断・治療するのが良いかについて論文を収集して検討し、このたび書籍「甲状腺ホルモン不応症診療の手引き」を刊行しました。

甲状腺ホルモン不応症は「バセドウ病」という別の甲状腺疾患などと間違われやすく、不適切な治療が行われることも珍しくないため、本書籍の刊行によって適切な診療が行えるようになると期待されます。甲状腺ホルモン不応症をどのように診療するべきかというガイドラインは他の国には存在しないため、世界初の手引きとなります。

ここでは、手引き作成までの背景、作成方法、社会的意義と今後の展望について概要を解説します。



ポイント

- 甲状腺ホルモン不応症はバセドウ病などと間違われやすく、不適切な治療が行われることも少なくない。
- これまでに発表された英語と日本語の論文を網羅的に解析して、現時点で最良と思われる診療方針を検討した。
- 世界初の試みと考えられる本研究により、今後甲状腺ホルモン不応症の診療が適切に行われることが期待される。

概要

【背景】

のどぼとけの下にある「甲状腺」という臓器は、「甲状腺ホルモン」というホルモンを作っています。甲状腺ホルモンは体の代謝を活発にしたり赤ちゃんの脳の発達を促したりする重要な作用があるため、ホルモンが多すぎたり少なすぎたりすると体に異常が生じます。

甲状腺ホルモン不応症というのは、甲状腺ホルモンは血液の中にたくさんあるのにホルモンが十分働かなくなる、生まれつきの病気です。この病気は国の指定難病に制定されています。甲状腺ホルモンが多くなる他の代表的な病気に「バセドウ病」がありますが、甲状腺ホルモン不応症でもホルモンの数値が高くなるため、甲状腺ホルモン不応症の患者さんはバセドウ病と間違えられて不適切な治療をされてしまうこともあります。甲状腺ホルモン不応症は4万人に1人くらいの割合で発症するという論文があり、この割合だとわが国には約3000人の患者さんがいる計算になりますが、実際にこれまでに報告されているのは100人ほどです。そのため、甲状腺ホルモン不応症の患者さんの多くは、バセドウ病などと間違えられていたり、病気があることに気づいていなかったりすることが予想されます。

この原因の一つに、甲状腺ホルモン不応症をどのように診断・治療するのが良いかという指針が世界的にも存在しないということが挙げられます。そこで今回、日本甲状腺学会の研究グループは、甲状腺ホルモン不応症という病気の「診療の手引き」を作成しました。

【作成方法】

これまでに発表された英語と日本語の論文を網羅的に解析して、現時点で最良と思われる診療方針を検討しました。治療に関する部分は、現在診療ガイドラインを作成する方法の世界基準とされている「GRADE」という方法に沿って検討しましたが、希少疾患なので論文があまり報告されていない内容も多く、そのような内容については専門家が実際に患者さんを診療した経験なども踏まえたうえで検討しました。疾患の概要、診断、治療について解説を行なって、診療の手引きを作成しました。

【社会的意義と今後の展望】

今回の手引きは、甲状腺ホルモン不応症をどのように診断・治療するかという疑問点に対して、現時点のわが国で最も適切と考えられる方針を提唱しています。甲状腺ホルモン不応症はバセドウ病などと間違われやすく、不適切な治療が行われることも珍しくなかったのですが、本書籍の刊行によって、この疾患を専門としていない医師を含めて適切な診療が行えるようになると期待されます。

研究グループが知る限り、甲状腺ホルモン不応症をどのように診療するのが良いかを示した世界初の手引きと考えられ、この疾患の診療レベルの向上に大きな役割を果たすと考えられます。また、今回詳細に検討した結果、「現時点で何がわかっていないか」が明らかになりましたので、今後はこのような疑問点を解決するための研究につながることを期待されます。

【書籍情報】

日本甲状腺学会編集．甲状腺ホルモン不応症診療の手引き．南江堂，東京．ISBN: 978-4-524-23386-1．2023年4月発行．